

「言語」の指導について



坂元彦太郎

△1▽

ある。

人間が他の動物とちがっている点をいい現わすいろいろな仕方のうちで、いちばん近代的な表現のひとつは、「人間とは記号をもつ動物である。」といいういの方である。ここで記号というのは、普通に使われているよりは、相当に広い意味である。一口でいうならば、ある実物とは別なものでありながらその実物を指示示したり、意味したりしているものである。人間の使うことばはもちろん、さけび声や手まねや身振りなどから、絵や図や文字やさまざまの符号や合図などにいたるまでをひっくるめて、ここでは記号といっているのである。いうなれば、実物、実際の対象が手もとになくとも、その代りになるものであり、直接に実際の対象に接触することなしに、その記号によって考えたり、ことがらを処理することができるのです。

こういう能力をとくに恵まれていていることが、人間の社会をこのよう今まで高度に発達させ、その文化を飛躍的に高いものにした、大きなものになつていて、というのである。このような能力が他の高等動物には全くない、というわけではないが、人間とくらべれば質的にも量的にも格段の差があるのである。たとえば、記号のうちの中核的なやくわりをしていることばにして見ても、チンパンジーを人間の幼児といっしょに、全く同じように養育してみても、他の部面においてはほとんど同様であるのに対し、ことばを使うことについてでは非常なちがいがおこるのである。また、インドでの、狼に育てられた姉弟や、アヴェロンの森の野生児などの場合を見ても、人間社会に復帰した当座は、ほとんどことばをもたないのに、しばらくするとしだいにことばが使えるようになった、という事実も、

いろいろなことを物語る。すなわち、人間に、ことばを駆使できる素質があつて、しかも、社会生活を重ねることによってそれが開展するものである。

話しことばは、さまざまな記号のうちで、著しい特色をもつものである。人間の社会に、絵という記号が使われた証とは一万年以上も前からあるが、話しことばについては、はつきりしたしようとはない。しかし、おそらく、それよりは相当前から人間のあいだに使われるようになってきていて、いったんこの種の記号が発達してくると、他の種の記号に大きく影響を与えることになり、文字のようなより高次の記号を生みだす下地になったのである。そして、他の種の記号の発達の契機になつただけでなく、人間の経験をたくわえたり、それを他の人に伝えたりすることに飛躍的にやくだけになり、さらに抽象的な合理的な思考を発達させるものになつたのである。

以上、かんたんに言語についての常識を述べたのであるが、幼児の教育と関連して、いくつかの問題をつぎに取りあげることにしよう。

△2▽

幼児期における言語の発達については、このごろは、相当すぐれた業績が現われている（本号にもいくつかの著作がある）。また、

幼児教育における「言語」の指導についても、関心をもつていたり、論をたてたりする人も決して少なくない。しかし、私にいわせると、この二つの実りの多い地域の中間に、奇妙に忘れられてほつたらとしてある重要な広い荒野が残っているのである。私が幼児教育にたずさわる人たちに、とくに関心をもつてもらいたい、と思うのが、また、このところなのである。

たとえば、何才にはどのくらいの語いがしゃへれるようになるのがわかるとか、あいさつをおしえたり、発音をなおしたりすることも、決して無意味なことではない。しかし、ことはどいうものの本質に照らして見て、こうした外面向につかみだせるとの奥に、もつと気をつけねばならないことが、いくつかあるのである。

まず、ことばに関する点では、それが指示示している対象との関係が大切である。ことばをうまく使うことができても、ことばのいちばん自身だけをたくみにあやつることができても、ことばのいちばん本義に迫つたことはいえないであろう。単に、記号だけを遊離しておぼえることにおわるのでなく、その示すことがらに即し、そのことがらのことがわかつたのでなければ、ほんとにことばが使えることではない。たとえば、数詞についても、それが口先でいえるだけでなく、具体的な事物や経験と対応して把あくされねばならぬい、ということはこのごろはよく指摘されているところであるが、これは数にとどまることではない。名詞にしろ、動詞にしろ、その

あらわしていることがらと一体的に把あくされているのでないかぎり、ほんとにことばがわかったとはいえない。ことはを現実の対象から切りはなして、いわは空虚にもてあそんだり、指導と称して單に口真似だけをさせることにおちいつてはならないのである。そういう癖をつけることは、将来、言語偏重主義（ヴァーハリズム）によばれるような態度を植えつけるものとなるかもしれない。

といって、ことばという記号をつくりだし、それを使うということは、現実の対象にある雰然たる混こんを整理し、すじみちをつけたことであるのはいうまでもない。こうした、系統化、抽象化、概念化というはたらきをことばが荷っていることは、見逃してはならない。幼児がことばを覚え、使っている過程においても、その関係している実際の印象とつながりを保ちながら、その中の共通的な、法則的な面をことばによってつかまえていくのた、ということを念頭において、こどもたちの発達を見まもっていなければならない。この面について、具体的にどんな指導を加えたらい、ということを指摘することは私にはできないが、やはり、実際の対象についての具体的な終始と密につながりをもちながら、ことはを発達させていくという、不斷の心がまえが大切であろう。

もう一步突つこんでいえば、言語は、人間の思考を支える内面的な道具である、といふことも忘れてはならないのである。いうまでもなく、言語はコミュニケーションの道具であり、経験を蓄積する

倉庫であるが、それとともに、経験を整理したり法則化したりするものであるということは、つまり、ことばの発達による概念のつみ重ねや展開によって人間の思考過程が成り立つのだ、ということである。もし、人間が言語をもたず、それを内面的な思考の道具にすることができなかつたら、人間は知識や科学をもつことはできず現在の文化を築くことはできなかつたであろう。

しかし、幼児の場合にも、そういう過程が幼児なりに行なわれているにはちがいないが、はつきりとそれを焦点にした指導を加えるというのは困難であろう。でも、幼児がことばをつかうとき、できるだけその示すところからについての、具体的な経験とのつながりにおいて把あくさせたり、声にださせたりするように気をつけることがのぞましい。ただ、ちゅうに口走ったり、流ちょうな音のながれに酔わしたり、成人の儀礼的な習慣にはめこんだりするのではなく、ことはを発することは幼児が自分でじっくりそのことを考へる、それについての自分の考えをまとめることなのだ、ということを指導者は絶えず意識し、幼児にしてもことはを出すことは、ことはを自分と切り離して空にうかべることだ、といった軽々しい態度におちこませないようにしたいものである。

いま一つ指摘しておきたいことは、今まで述べてきたように、ことばは単に知的な伝達や思考の道具であるだけではなく、情的な表現のミディアである、という点である。

幼児の言語を指導する、こととさら意識しないときには、案外、私がこれから指摘しようとするような弱点にはおちいらないのであるが、言語のことを指導しようと意識的に企てる人たちがかえっておちいりやすい傾向があるのである。すなわち、ことばを正しく使うことができるよう意図的に導くことになると、ともすると、ことばだけを空にうかばせて、成人のことばの使い方を習わせようとする。はつきり元気よくいわしたり、よく先生のことばに耳を傾けさせたりすることが、のぞましいのはもちろんであるが、正しい「表現」をさせよう、というようになると、だんだん危くなるのである。

極言すれば、ことばをじょうずに使う（このことを表面的に解して）ことよりもむしろ、ほんとうの気持ちが現われているか、現わそうという努力がふくまれているか、が問題なのである。「巧言」で人をまどわすような指導がされるわけはないが、うつかりするとその下地をつくらないでもないよう、「言語の指導」というものには常に反省と批判とを怠らないようにしなければなるまい。

正直に自分の気持ちや考えを人に伝え、また、人の真情を真正面に受け取ることができるよう、そういうたゆらの幼児との生活がもたらねばなるまい。これまた極言であるが、むしろ、作為的に言語の指導をするよりも、幼児の具体的な生活を、相互に愛情と信頼を保ちながら、幼児なりに展開さず、といつたひるい態度を根底にして、その一端として、言語の面に触れる、ということが大切ではなかろうか。

というのは、ことばは、人と人との間をつなぐ、情的なくさりでもあるからである。ただ、情的なつながりは必ずしも「ことば」という形だけでは現れず、さまざまな身振りや感情や動作や息づかいなどと一体になって現われる、ときには、ことばになる以前の、半ば隠微なすがたで真情が通じることもある。おそらく、幼児の場合には、ことの外こういった場合が多いのではないかろうか。したがつて、ことさらに言語の指導ということを意識することが、ともすると、こうした情的なものの具体的な組織を解きほぐして、ことばだ

けを遊離さしてしまい、かくて、ことばを使うことと、真情を通ずることとが別なるきつかけをつくるおそれがあるのである。

以上「言語の本質についてより深い認識をもつことを要望する」とともに、三点にわたって、まことに粗雑であるが、言語に関する研究や「指導」の盲点について述べてみた。